

「創立以来の事」という寛文十二年（一六七二）の記録なる古文書が越谷市史に掲載され、原文は勝林寺に現存。

これによると、万寿二年（一〇二五）三月十日下総国葛飾郡百間郷下河辺山中という里に源勝という僧が一字の堂を建立し、聖観音を祀った。この観音像は恵心僧都の作である。その後嘉禎三年（一二三三）衆人によつて荒れた堂舎が修復され観音霊場として、永く信仰を集めてきた。

大永年間岩付の土豪波江氏と太田氏が覇を競い合戦。死没する者も多かつたので、その菩提を弔つた。当時、慈恩寺に所屬していた観音霊場は、無体で荒廃していたので、黙堂闇契によつて修繕され再興された。寺号を改めて、法恩山勝林寺と号し、天文元年（一五三二）八月曹洞宗に転宗して開山した。波江氏の守護仏として崇めていた岩付城の十一面観音を城裏口から譲り受け、天松玄固が請取り、播仏師に修復させ安置することになった。又、涅槃像は修復し妻子の為、新しく釈迦牟尼佛を造立して祀つた。

岩槻にある福嚴寺の九世孤心月が書き改めた福嚴寺由緒記によると、黙堂闇契は岩付波江氏の長男として生まれ、大永年間（一五二一〜二八）頃に菖蒲町にある三箇村の長龍寺で得度したといわれる。黙堂闇契は長龍寺三世となり、後に岩槻福嚴寺を開山。その一年後、増林勝林寺をも開山した。

観音堂敷地は万寿二年に五拾坪有りと伝えられているが、宝曆六年（一七五六）十月代官辻源五郎（一七四九〜六六まで代官を勤め、武蔵国天領を支配していた）検地帳によると

間口七間半、奥行六間半の壱畝拾九歩（四拾九坪）とあり、

観音堂地が独立し御除地として認められている。しかし、嘉永五年二月の大火で不幸に接して堂宇が全焼してしまふ。

仰々当山 ハ ヲ ヲ 今 去 事 ル 三十四年前火災 不幸 遭遇 ニ 境内

堂塔十四棟悉 ク 灰煙 帰 ニ 惨状見 忍 ルニヒザリキ

云々と古文にある。

現在、勝林寺境内に板碑がある。秩父地方原産の緑泥片岩製の石塔婆である。

月待供養塔 文明十三年（一四七一）十一月廿三日
と印刻された美しい十三仏板碑である。

禅宗寺院として初めから建立された寺院は、釈迦如来を崇めている。比企郡都幾川村靈山院は、禅宗としては関東で最古の開山した寺院である。建久八年（一一九七）明庵栄西の高弟栄朝によって創建された臨濟宗であり、本尊は、釈迦である。

福井県吉田郡永平寺町にある曹洞宗大本山永平寺は大仏寺という号から一二四六（寛元四年）永平寺という寺号に改めたが、ご本尊は当初から釈迦如来である。

ここで少々仏教寺院の変遷について記すと、鎌倉時代までは宗派も固定化されて来ていたが、やがて戦国時代になり、各地のお寺も荒れ果てて住職の多くも戦乱を避けて逃げ出し、無住になってしまいう寺が各地に増加。せつかく寺も仏像も焼けずに残った住職のいなお寺では、村人達も困っていた。諸国を遍歴していた僧らは、その時、その寺の本来の宗派に関係なく別の宗派のまま、無住の寺に入り、復興を始めたのである。天台系の仏像があった寺でも、禅宗の僧が入り、禅宗の寺となってきた。

県内臨濟宗九十九ヶ寺を分析すると、釈迦を本尊とする寺が三十七ヶ寺、釈迦文殊普賢一ヶ寺であり、全体の三十九パーセント、その他の仏様は六十一パーセントである。

曹洞宗については、五百三十三ヶ寺を分析すると、釈迦、釈迦文殊普賢、釈迦阿難迦葉、三尊釈迦、華嚴釈迦、釈迦弥陀拈華釈迦、合計百九十五ヶ寺、四十パーセントであり、他仏様本尊とする寺は約六十パーセントにもなってしまう。

釈迦如来を本尊とするはずの寺で、観音菩薩を本尊としているような寺は、遠い昔、天台宗や真言宗として建立されたお寺だったのかもしれない。

法恩山勝林寺

慈恩寺の恩 最初の開創源勝の勝

この二文字をいただいたと思うのは私の感傷だろうか。

法恩山勝林寺開山 黙堂閻契

天文七年（一五三九）四月十二日 酉の刻（午後六時）六十才死寂

勝林寺二世 天松玄固

天文二十三年 寅 五月八日死寂

